第52回日本組織細胞化学会 総会・学術集会

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井関, 尚一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/29636

『学会開催報告』

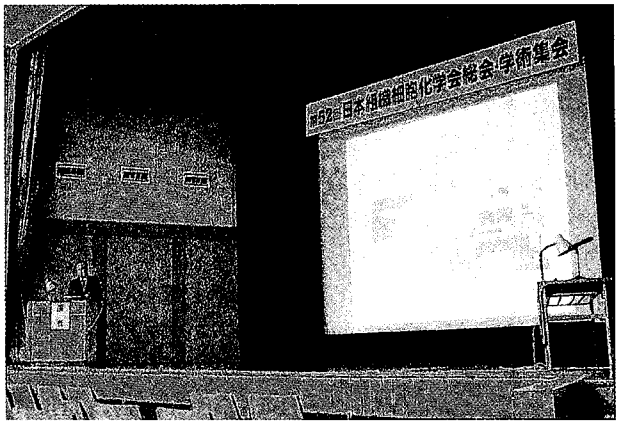
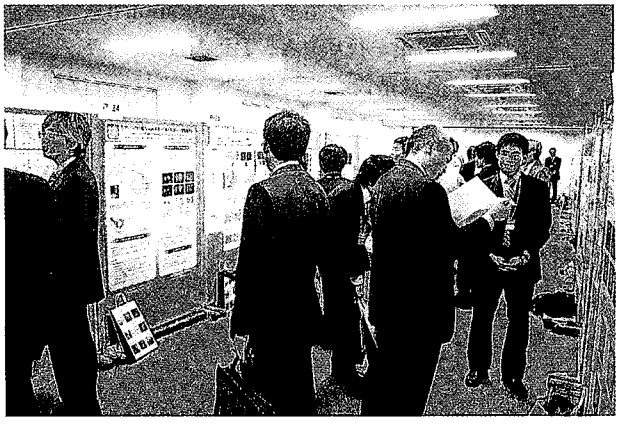
第52回日本組織細胞化学会総会・学術集会

52th Annual Meeting of the Japan Society of Histochemistry and Cytochemistry

金沢大学医薬保健研究域医学系組織発達構築学
会長　井　関　尚　一

9月24－25日の2日間，十全講堂および医学類校舎において，第52回日本組織細胞化学会総会・学術集会を開催しました．組織細胞化学は，細胞や組織における分子の局在や機能を可視化し，主に顕微鏡を用いて調べることにより，生体機能を形態学の基盤のもとに研究する学問です．1939年の高松英雄博士によるアルカリフォスファターゼ酵素反応の局在を嚆矢として，これまで酵素組織化学，オートラジオグラフィー，免疫組織細胞化学，in situハイブリダイゼーションなどの技術が開発され，広く用いられてきました．2009年に創立50周年を迎えた日本組織細胞化学会は，解剖学者，病理学者を中心に基礎生物学者，臨床医学研究者，臨床検査関係の研究者等により構成されています．今回は全国から約150人が参加して，特別講演1題，受賞講演2題，シンポジウム4セッション，ワークショップ2セッション，一般口演22題，ポスター46題の発表が行なわれ，好天にも恵まれて大過なく終了しました．

まず高速原子間力顕微鏡の開発者である金沢大学理工研究域の安藤敏夫教授による特別講演「タンパク質分子の構造と動的挙動の高解像度撮影」では，リアルタイムでの生体分子の動きの映像が紹介されました．この講演は一般の教員や学生にも公開され，好評を得ました．シンポジウムでは，「レポーター遺伝子発現マウスを利用した組織化学的研究の新展開」および「組織化学と分子イメージング－ミクロからマクロまで」において新しい組織細胞化学的技術や研究法を取り上げました．前者は，近年の遺伝子改変動物でレポーター遺伝子発現を用いて特定の分子や細胞をGFP蛍光やLacZ染色により可視化して追跡する研究法を，あらためて組織細胞化学として位置付けたものです．後者は，分子イメージング技術の細胞レベルから器官レベルまでの応用について紹介したものであり，このうち器官レベルのイメージングでは本学の絹谷清剛教授に講演をお願いしました．学会の高松賞を受賞した名古屋大の藤本豊士教授による講演「電顕で脂質を見る」およびワークショップ「組織細胞化学における電顕の活用」では，電顕的組織化学を駆使した研究が紹介されました．また免疫組織化学，糖鎖組織化学およびin situ hybridizationの病理学領域での応用に関して，2つのシンポジウム「DNA in situ hybridizationの病理診断への応用」および「肝胆膵研究の新展開」が行なわれ，それぞれ本学の大井章史教授，佐々木素子准教授にオーガナイザー兼座長の労をお取りいただき，また本田政夫教授にシンポジウム演者をお願いしました．さらに，初の試みとして日本唾液腺学会との共催ワークショップ「組織化学から見た唾液腺の正常と異常」を行いました．一般演題では，最近の全国学術集会がポスター発表のみになりがちなので，学会の原点に返る意味でポスター以外に口演発表も行いました．

懇親会は附属病院の済美会レストランで行ない，アトラクションとして西の茶屋街の二人による「一調一管」の公演を行いましたが，病院食堂らしからぬ美味な料理と，金沢伝統芸能は参加者に好評でした．学会期間中，医学部記念館資料室を公開しましたが，参加者は目玉とも言うべきキンストレーキに興味深く見入り，本学の創立150周年のよい宣伝になったと思います．

組織細胞化学会のように，異なる専門分野の研究者が共通の方法論への興味で結ばれて情報を交換し合う学会は貴重な存在であり，もっと大事にしていくべきだという感を深くいたしました．最後に，ほとんど手作りとも言うべき学会運営にご協力くださった教室員や学生諸君に感謝申し上げます．